



IMT本部での交代式で敬礼する新任のマレーシア部隊=2015年3月14日撮影

Bangsamoro 報告

<第6話>

ミンダナオ平和構築支援の現場から

中坪 央暁

(国際開発ジャーナル社編集委員)

ある兵士の記憶

バンサモロの中心都市コタバトにある国際監視団 (IMT) 本部の狭い前庭に3月14日朝、マレーシアから空路やって来た政府軍・警察部隊16人が予定より2時間遅れで到着した。イスラム国家のマレーシアを中核とするIMTは、2004年の創設以降、少将クラスの歴代団長を含めて任期1年の同国部隊の交代をもってサイクルを数え、第9期から第10期への交代式がこの日行われた。イスラム教とキリスト教の祈り、新旧団長の引き継ぎ書面および団旗受け渡しをもって、延々待たされた割に式典は約10分であっさり終わった。

帰国するマレーシア団員と、引き続き任務に当

たる他国の団員が別れの握手を交わす中に、ポロシャツのユニフォーム姿の中川亨之がいた。2012年10月にIMT本部に着任した中川は、今や現役団員の最古参である。国際協力機構 (JICA) から外務省に出向し、在フィリピン大使館一等書記官の身分でコタバトに常駐しており、同じくマニラから定期的に通って来る多田知幸とともに、日本人要員2人体制を維持している。

2003年の停戦合意に基づき、フィリピン政府とモロ・イスラム解放戦線 (MILF) 双方の要請で設置されたIMTは現在、マレーシア、ブルネイ、日本、ノルウェー、インドネシアが参画 (リビア、

欧州連合＝EUは脱退）、①治安、②人道復興支援、③社会経済開発、④市民保護の4部門に計38人が配置され、本部と4支部を置く。日本は2006年以降、社会経済開発分野の要員として計7人の団員を継続派遣してきた。軍人・警察官が3分の2を占めるが、全くの非武装であり、何かあればフィリピン政府軍とMILFが防護することになっている。土地争いなど複雑な利害が絡み合ううえ、銃器があふれる当地では、いわゆる紛争とは別に“Rido”と呼ばれる氏族同士の小競り合いが日常的に起きるため、IMTが当事者間の話し合いの場を提供するなど仲介役を務めることもある。

警察特殊部隊やMILFなど60人余りが死亡した1月25日のママサパノ事件では、政府軍が2月下旬～3月末、事件の原因になった「バンサモロ・イスラム自由戦士団」(BIFF)の掃討作戦を展開し、最大時12万人超の国内避難民が発生するなど地域の治安情勢に多大な影響を与えた。IMTは事件発生直後に現場に急行するとともに、国際機関や地元NGOとも連携して避難民の状況などを把握し、関係者の信頼醸成をサポートしている。アロヨ政権時代の2008～09年、最終合意を目前にして戦火が再燃し、日本を除くIMTの大半が一時撤退する事態に陥ったことがあるが、今回の混乱は幸い限定的な地域に留まった。

着任したばかりのシェイク・モクシンIMT新団長(マレーシア陸軍少将)に尋ねると、「ママサパノ事件は関係者の目を覚まさせ、連絡・調整の重要性を再認識する契機になった。一時的な混乱はあるが、治安の安定には自信を持っており、バンサモロ基本法案の審議を含めて和平プロセス全体を楽観している」と強調するとともに、「紛争の背景には貧困問題があり、その解消には経済開発が必要だ。日本は政治交渉から草の根レベルまで関与し、現地の人々のニーズを汲み上げて開発支援を行っており、平和の定着に向けて大きな貢



帰国するマレーシア団員と談笑する中川(中央)と多田

献をしていることを高く評価している」と述べ、軍人とは思えない開発への理解を示した。

中川はJICA入構後、ボスニア・ヘルツェゴヴィナや東ティモールの復興支援、アフガニスタン事務所などを経て当地に派遣され、平和構築分野に特に思い入れがある。IMTの日常業務をこなす傍ら、日本政府の包括支援・通称J-BIRDに関わるニーズ調査や案件形成、実施状況の視察に走り回っているため、MILF幹部やムスリム・ミンダナオ自治区(ARMM)政府、地元有力者、NGOなどに顔が広く、身内のように親しまれている。MILFのムラド議長夫人から採れたての野菜が届いたこともある。「日本はIMT参加前の1990年代から支援を実施し、バンサモロ地域のリーディング・ドナーとして、フィリピン政府やMILF、他の援助機関からも一目置かれる存在です。『日本の支援は他の開発パートナーよりも1周早い』という声も聞かれ、地元の人々にも感謝されていると率直に感じます」(中川)。国連機関やアジア開発銀行、オーストラリアなどのプレーヤーもいるが、現場レベルでの日本の存在感は群を抜いており、初めての相手でも“JAPAN”と言えば気を許してくれるので、筆者も取材しやすい。

中川は「平和構築の現場で社会経済開発が担う役割は非常に大きいと考えます。理想論ではなく

現実と向き合い、現場に何度も足を運んで人々の声を聞いて、具体的な支援につなげる橋渡しをするのが私たちの仕事です。外国人である第三者だからこそ貢献できること、逆にすべきではないことに留意しつつ、多くの関係者が培ってきた日本への信頼と地道な努力を引き継ぎ、和平に少しでも貢献できればと思います」と話す。



開発協力の重要なカウンターパートの一つが、MILFの開発機関バンサモロ開発庁（BDA）である。改めて説明しておく、BDAは将来的に自治政府による地域開発と行政サービスを担う任務を与えられた組織だが、ARMM政府および自治体という既存の地方行政システムが機能する現時点では、NGOのようなものというか、少なくとも官庁とは言いがたい立ち位置にある。

「ですから、今年発足する予定のバンサモロ暫定政府（BTA）、それに続くバンサモロ政府では、BDAが正式な政府機関に位置付けられる必要があります」と訴えるのは、BDA事務局長のモハマド・ヤコブである。BDAは従来、市内の一軒家を借りていたが、トルコ政府の資金援助と日本大使館の草の根無償資金協力で郊外に建設された研修所併設の3階建て本部に2月に移転したばかり。本部のほかに域内7支部を配し、職員87人とボランティア職員約300人がいる。

BDAには目下、決まった財源がなく、各ドナーが実施するプロジェクトベースで予算が付く不安定な運営を余儀なくされている。すでに紹介した通り、JICAの支援事業としてマギンダナオ州スルタン・マストゥラ町で実施中の淡水魚養殖と野菜栽培、および道路整備プロジェクトは、BDA職員の行政能力向上を主な目的にしている。事業自体の主役は農民グループだが、ニーズ調査から案件形成、計画策定・実施まで、BDAの地域担当者が日本人専門家と一緒に遂行する仕立てである。BDA職員

の中には元行政官もいるが、多くは行政経験のない元MILF兵士や農民だ。MILFは軍事組織であると同時に、もともと支配地域の教育・福祉など民生部門を独自に担いたいという志向があり、従って適格性は充分にあるのだが、問題はこの助走期間中にプロジェクトを通じた実地訓練の機会が不足していることである。

ヤコブは「スルタン・マストゥラ町の事業は、具体的に生計向上の成果を上げている数少ない事例であり、これをバンサモロ全体に広げていければと考えます。治安の問題はありますが、タウイタウイなど島しょ部でも同様の事業を実施したい。いずれにせよ、BDAとコミュニティーと一緒にノウハウを学びながら取り組む必要があります」と述べるとともに、「政府と地域、国際社会が一体となって最終和平に向かう今こそ、待ち望んだ開発のチャンスであり、私たちBDAが人々の期待に応えていかなければなりません」と話す。10人の子どもの父親でもある45歳の事務局長にとって、バンサモロの未来は、次世代の子どもたちの未来そのものと言えるかもしれない。



MILF幹部に会う機会はあるが、逆に“ムジャヒディン”（イスラム聖戦士）と呼ばれる末端の兵士がどんな人びとなのか、そもそもプロの戦闘



BDA事務局長のヤコブと若い職員たち



元MILF兵士のサイデン(右)と娘のサグイラ

員なのか、農民の義勇兵なのかもよく知らない。「そういう体験談を聞けないかなあ」とつぶやいたら、現地助手のマギンダナオ人女性、サグイラ・サイデンが「私の父は元MILF兵士で、2000年ごろまで戦っていましたが…会いますか?」と言い出して、早速コタバトまで来てもらった。

ワルノ・サイデン(61歳)は、コタバトから車で1時間半ほどの北コタバト州マタラン町に暮らす農民である。小柄ながら真っ黒に日焼けした精やかな風ぼうを見て、一瞬、ルバング島の小野田寛郎少尉(故人)を思い出した。

マギンダナオ州ピキット町の貧しい農家に生まれ、両親を早くに亡くして、小学校は1~2年しか通っていない。マルコス独裁政権下でモロ民族解放戦線(MNLF)が武装闘争を開始した1970年、16歳で銃を手にした。「政府軍がイスラム教徒に戦争を仕掛けて来たので、迷わず戦いに加わった。周りの誰もがそうだったし、怖いと感じたことはなかった」。1984年にMNLFから主戦派のMILFが分派すると、サイデンも「降伏するよりは戦って死んだほうが良いと思って」MILFに従い、小隊長として前線で36人の部隊を率いた。この間、同じくMILF兵士だった兄が戦死し、自身も至近距離の爆発で右耳の聴力を失った。

80年にMILFの後方支援をしていた今の奥さんと

結婚し、5男5女をもうける。あくまで本職は農業だが、腰を据えて耕作ができるはずもなく、政府軍の掃討作戦がある度に女性や子どもを逃がし、サイデンたち兵士が応戦する繰り返しだった。

「政府軍はヘリコプターや戦車を投入してきたが、われわれはRPG(対戦車兵器)などで対抗した。たいていは同じM16の撃ち合いなので、個々の戦闘では負けなかった」。サイデンの記憶では、戦闘員の中にはマレーシア、ヨルダン、アフガニスタンなど外国人もいたという。

敵対するMNLFにサイデンが一時拉致されたこともあり、身の危険を感じた一家は97年、コタバト北方に位置するMILFの軍事拠点キャンプ・アブバカルに移る。小学生だった娘のサグイラは当時のことをよく覚えており、「小屋のような家を建て、両親は畑を耕していました。小学校もあって、ここでは家族が安心して平和に暮らすことができました」と話す。しかし「戦時下の楽園」もつかの間、エストラダ政権による大攻勢が2000年4月に始まり、「激しい空爆が続くと、こちらは塹壕に隠れて手も足も出せない。最後はアブバカルを明け渡すしかなかった」(サイデン)。幸い一家は無事に逃げ延び、避難民センターなどに滞在した後、妻の故郷の村に落ち着いた。サイデンはわずか2ヘクタールの土地でコメやトウモロコシを作りながら、日銭稼ぎの大工仕事を請け負う日々だが、迷彩服姿の写真を付したMILF小隊長の身分証のようなものを大事に持っている。

自分は小学校にも満足に通えなかった分、子どもたちの教育には熱心で、教師になった長女をはじめ何人かは大学まで進学させた。「字の読み書きもほとんどできませんが、私たちにとって本当に優しい父です」というサグイラが、マギンダナオ語で語る父親の言葉を英訳して伝えてくれたのが、この“戦記”である。「今は家族と平和に暮らすことが一番大切だと思っている。バンサモロは豊かな土地だから、国際社会が力を貸してくれれば、きっと良くなると思う」。元MILF兵士は生真面目な表情で付け加えた。*文中敬称略(つづく)